

## 子の発達段階の特徴と両親の別居や紛争に対する反応

年齢	子の発達段階の特徴	両親の別居や紛争に対する反応
乳 児 期 (～1歳6か月)	①養育者との愛着を形成し、人に対する基本的信頼を獲得する。 ②情緒を分化させ、自分の感情や行動を自己調整する。	①不安や恐れを示す。 ②食事、排泄、睡眠の習慣が障害を受ける。
幼 児 期 前 半 (～3歳)	①自分と他者を区別し、分離不安に対処する。親から離れるために、ぬいぐるみなどの移行対象が重要になる。 ②衝動を統制する。自己主張が激しくなり、しつけようとする親に抵抗することがある。	①主たる養育者から離れるときに分離不安を示す。 ②かんしゃくを起こしたり、無気力になる。 ③両親間の緊張、怒り、暴力に敏感になる。
幼 児 期 後 半 (～6歳)	①愛着対象についてのイメージを支えとして、ある程度一人でいられるようになる。 ②外界に対する認知が自己中心的で、現実把握が不十分であるため、空想と現実の境目があいまいになりやすい。 ③欲求や情緒をコントロールし、相手の気持ちを理解しながら他者とかかわり始める。	①両親の別居について、いずれも仲直りしてくれるはずだと空想する。 ②親の別居が自分の責任だと感じる。 ③親から捨てられるのではないかとという恐れを感じる。
学 童 期 前 半 (～9歳)	①具体的な事柄については抽象的な思考ができるが、良い・悪いという極端な評価をしたり、現実離れした空想を抱く。 ②社会性が発達し、ルールに従った行動ができ、秘密を少し持てるようになる。	①両親の不和を理解できるようになるが、両親の問題と自分の問題を分けて考えることが出来ない。 ②両親の不和を自分のせいだと感じたり、両親とも裏切れないという忠誠葛藤を抱くが、そうした気持ちを内に溜め込みやすい。
学 童 期 後 半 (～12歳)	①親との心理的な距離ができ、現実認識力が向上するが、一人で問題を解決するまでに至らない。 ②良い・悪いという二分法で物事を見て、公平であることを求める。 ③友人との関係の重要度が増し、塾やスポーツクラブなど課外活動が増える。	対処困難な場面では親に依存しているため、両親間の紛争に巻き込まれやすく、忠誠葛藤を起こしたり、一方の親と強く結びつき、他方の親が全て悪いと考えて、他方の親に対して敵意を示すことがある。
思 春 期 (～15歳)	①両親から自立し、親とは別のアイデンティティを確立する。 ②抽象的な思考力が発達するが、試行錯誤して、言動が一致しないことも多い。 ③性的な衝動の高まりに対処する。	①家族が不安定になり、子の自立に困難を伴うことがある。 ②親の教育する力が弱まり、子の行動の統制がうまくできない。 ③両親の不和を男女関係の失敗と認識し、自身の異性関係に不安を抱く。